

15. 悪性リンパ腫脊髄進展の総合画像診断

藤本 肇 岡田 淳一 伊丹 純
李 元浩 宇野 公一 有水 昇
(千葉大・放)

脊髄への進展をきたした悪性リンパ腫4例を経験した。⁶⁷Ga imageを施行した例において、病変はすべて異常集積として描出され、また、Magnetic Resonance Imageにても、T₁またはT₂の延長した腫瘍として描出し得た。また、Myelography その他の画像診断にて推定された病変の範囲と、⁶⁷Ga imageおよびMR imageによって得られた腫瘍像は、解剖学的によく一致した。

これらの診断方法は、無侵襲かつ直接的に腫瘍を描出する手段であり、また、腫瘍周囲との解剖学的位置関係の把握に有用であり、治療経過の評価にも利用でき得ることが示唆され、Myelography その他のX線診断的手法と組み合わせての総合画像診断におけるこれら諸法の意義を確認した。

16. 抗AFPモノクローナル抗体を用いた肝癌の腫瘍イメージング

橋本 禎介 中村佳代子 西口 郁
高木八重子 久保 敦司 橋本 省三
(慶大・放)
細川 斉子 安田 雅美 長池 一博
(三菱化成・総研)

今回、われわれは、AFPに対するモノクローナル抗体を用いて肝癌に対する腫瘍イメージングの可能性の検討を行ったので報告致した。1) 抗体：抗AFPモノクローナル抗体(19F12)は、ヒト胎盤由来AFPを抗原としたマウスB cell hybridoma法により作製。2) 標識：Chloramine T法を用いて放射性ヨード(I-125あるいはI-131)にて標識。3) 担癌ヌードマウス：ヌードマウスに人肝細胞癌(NuE)あるいは人胃癌(MKN 45)を移植し、腫瘍径が約1~3 cm大のものを実験に供した。4) 腫瘍イメージング：肝癌移植ヌードマウスに放射性ヨード標識モノクローナル抗体50~100 μ Ci(13~18 mCi/mg prot)を尾静注し、経日的にシンチカメラにてイメージングを行い同時にデータをミニコンピュータに収集した。5) 体内分布：標識モノクローナル抗体投与後8日目

の体内分布についての検討を行った。肝癌は標識モノクローナル抗体投与後1日目より陽性描画され、経日的にバックグラウンドが低下し、腫瘍の陽性像が明瞭となった。投与後8日目の【腫瘍】/【肝臓】比は、肝癌では対照とした胃癌に比し有意に高い値が得られ、また、Ga-67-citrateでは、肝癌のみならず肝臓が強く描出されたのに対し、標識モノクローナル抗体では高い【腫瘍】/【肝臓】比が得られ、肝臓内での肝癌の検出さらには転移巣の陽性描画に本法は有用であると思われた。

17. 分化型甲状腺癌肺転移のI-131治療効果における諸因子の検討

高田ゆかり 扇 和之 板橋 健司
川上 興一 太田 淑子 川崎 幸子
牧 正子 廣江 道昭 日下部きよ子
(東女医大・放)
山崎統四郎 (放医研)

1973年から1981年までに当科においてヨード治療が行われ経過観察可能であった分化型甲状腺癌肺転移例26例についてヨード治療効果における諸因子の検討を行った。胸部X線上陰影をFineとCoarseに分類しその改善を、またヨード集積のみのみられるOccult転移については集積の消失を効果ありとし全体26例中14例の53.8%に効果がみられた。40歳以下、Fine、ヨード集積の良いものに有意に効果かみられた。また集積程度は年齢、X線タイプに影響され組織に関連性は認められなかった。予後との関係は、癌病巣消失例および改善例は集積良好でOccult、Fineに多くみられた。ヨード治療効果にはヨード集積程度のほか、年齢と胸部X線像のタイプも考慮すべき因子と思われる。

18. 化膿性脊椎炎の1例

鎌田 栄 (君津中央病院・整)

糖尿病に合併した化膿性脊椎炎、および化膿性鎖骨骨髄炎の1例を経験し、核医学的検討を加え報告した。

症例は53歳男性。従来より糖尿病を指摘されるも放置、また5年前左鎖骨皮下骨折後化膿性骨髄炎となり瘻孔を形成し現在に至る。昭和60年5月2日誘因なく腰痛出現、腰椎単純レ線にて著変なく放置、6月21日仰